

1 1	深谷市立明戸小学校 外小学校 18校 深谷市立明戸中学校 外中学校 9校	24～26
-----	---	-------

## 平成 26 年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

郷土の偉人渋沢栄一翁の「立志と忠恕の精神」を受け継ぎ、国際社会で求められる外国語能力を有し、世界に雄飛する人材育成並びに小中一貫教育のカリキュラムによる指導及び評価の研究開発（市内全小・中学校）

### 2 研究の概要

小学校第3学年から中学校第3学年までの英語教育における7年間の一貫教育を行う。その際、子どもたちの学びと育ちの連続性を踏まえ、小学校第3～4学年を体験型学習期（Stage 1）、小学校第5学年～中学校第1学年を活用型学習期（Stage 2）、中学校第2～3学年を統合型学習期（Stage 3）とする。

その上で、各ステージの目指す児童生徒の具体像を設定し、研究仮説に基づいて、指導内容・指導方法の充実を図るとともに、コミュニケーション能力育成のための指導と評価の在り方を研究する。

具体的には、研究テーマを設定し、小学校においては主に「忠恕の心」を基本としたコミュニケーションを図る活動を充実する。教室で学んだことを実際の生活で生かしたり、教室外で体験したことを外国語活動の中で生かしたりする活動を行う。

中学校においては、主に「立志の精神」を基本として、これまでに学んだことや体験したことを、自らの思いや考えとして表現する能力や態度を育成する。

更に、研究開発をより一層深めるために、拠点校制度を設けて先進的な取組を行い、全小・中学校にその成果を広める。また、校内研究推進体制をより一層強化するために、小学校外国語活動推進教師を各学校に置く。

### 3 研究仮説等

#### （1）目指す児童像・生徒像

研究開発課題に迫るため、目指す児童像・生徒像を次のように設定した。

夢とこころざしをもち、まごころと思いやりのある深谷の子		
小学校 3～4 年生	小学校 5 年生～中学校 2 年生	中学校 2～3 年生
わかりやすく楽しい外国語活動を通して、幅広い言語に関する能力や日本人・深谷人としての誇りと国際感覚をもち、相手意識や目的意識をもちながら、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童	生活体験や学習経験を生かした外国語活動／英語授業を通して、幅広い言語に関する能力や日本人・深谷人としての誇りと国際感覚をもち、相手意識や目的意識をもちながら、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童生徒	4 技能を総合的に育成する英語授業を通して、言語や文化に対する理解を深め、日本人・深谷人としての誇りと国際感覚をもち、実際のコミュニケーションを目的として、英語を運用できる生徒

#### （3）研究テーマ

目指す児童生徒を育成するため、研究テーマを次のように設定した。

<p>【本研究のテーマ】</p> <p>立志と忠恕の心で、Real World と教室をつなぐ外国語活動／英語授業 ～生活体験・学習経験を生かして（小）、自己表現力の育成を通して（中）～</p>
---

#### (4) 研究の視点

##### ア 7年間の一貫教育の構成

子どもたちの学びと育ちの連続性を踏まえ、次の3つのステージに分けてカリキュラム開発を行った。

Stage 1	Stage 2	Stage 3
小学校3～4年生	小学校5年生～中学校1年生	中学校2～3年生
体験型学習期	活用型学習期	統合型学習期
教育課程の特例を受けている2つの学年をまとめて「体験型学習期 (Stage 1)」とした。本市独自のカリキュラムを開発・実施し、教育効果を検証する。	小・中学校にまたがる3つの学年をまとめて「活用型学習期 (Stage 2)」とした。子どもたちの学びと育ちの連続性に配慮したカリキュラムを開発・実施することにより、中1ギャップの解消及び学力向上を目指す。	義務教育最後の2年間をまとめて「統合型学習期 (Stage 3)」とした。4技能を総合的に育成する英語授業を通して、自己表現力のより一層の向上を図る。

##### イ 目指す児童生徒の具体像

○ 渋沢栄一翁の「立志と忠恕の精神」を基本として、
1 「知りたい」と思って「聞こう」とする子 (Stage 1)
2 「伝えたい」と思って「話そう」とする子 (Stage 1)
3 「わかり合いたい」と思って「話し合おう」とする子 (Stage 2)
4 自分の思いや考えもち、臆することなく表現できる子 (Stage 3)

#### (5) 研究の仮説

仮説1	実際の生活や授業で役立つ内容の外国語活動を工夫すれば、「知りたい」と思って「聞こう」とする児童が育つであろう。
仮説2	実際の生活や授業を生かした自己表現ができる外国語活動を工夫すれば、「伝えたい」と思って「話そう」とする児童が育つであろう。
仮説3	立志と忠恕の精神を基本として、実際の生活や授業に関連した外国語活動／英語授業を工夫すれば、「わかり合いたい」と思って「話し合おう」とする児童生徒が育つであろう
仮説4	立志と忠恕の精神を基本として、4技能を総合的に育成する授業を工夫すれば、「相手の思いや考えを共感的に理解したり、自分の思いや考えを臆することなく表現したりできる」生徒が育つであろう。
仮説5	日常生活の中で、楽しく外国語活動／英語授業に取り組める学習環境を整備し、日常生活の中で指導を加えていけば、「言語や文化に対する興味をもって、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする」児童生徒が育つであろう。

Stage 仮説	Stage 1	Stage 2	Stage 3
	小3～小4	小5～中1	中2～中3
仮説1	→		
仮説2	→		
仮説3		→	
仮説4			→
仮説5	→		

## (6) 必要となる教育課程の特例

- ・小学校第3～4学年に「外国語活動」を週1時間設定する。
- ・小学校第3～4学年は、総合的な学習の時間を各35時間削減する。
- ・中学校では、教育課程の特例は設けない。

## 4 研究の内容

### (1) 教育課程の内容

- 小学校第3学年から外国語活動を週1単位時間行うことにより、小・中学校7年間を一貫した英語教育を実施する。

上記の目的に迫るため、次のような取組を行う。

- (ア) 渋沢栄一翁の「立志と忠恕の精神」を英語教育の基本に据えて研究を進める。  
※ 「わかり合いたいと思って話し合おうとする態度（忠恕）」と「自らの思いや考えをもち、臆することなく表現する能力と態度（立志）」を基本としたコミュニケーション能力の育成を図ることとする。
- (イ) 生活体験や学習経験を生かし、目的意識や相手意識を重視したコミュニケーション活動を行う。(Stage 1、2)
- (ウ) 自らの思いや考えをもたせ、主として「話すこと」「書くこと」の表現力を育成する。(Stage 3)
- (エ) 外国語活動や英語授業以外の学校生活の中で、英語に触れる機会を増やす。
- (オ) ステージごとに効果の検証を実施し、児童生徒の外国語能力を把握する。
- (カ) 全ての教室に整備されたICT環境を生かした指導方法の工夫改善を行う。

### (2) 研究の経過

<b>第一年次</b>	<p><b>【研究組織体制について】</b> 深谷市英語教育推進チームを教育委員会に設置するとともに、深谷市小・中学校英語教育運営指導委員会、深谷市小・中学校英語教育研究推進委員会を設置する。市教育委員会がリーダーシップをとって研究を推進する。</p> <p><b>【小中連携について】</b> 深谷市小・中学校英語教育研究推進委員会が中心となって研究を推進する。具体的には、小・中学校教員の連携の場として、中学校ブロックを基本とした授業研究会を行う。併せて、年間を通して研究推進会議を開催し、情報交換を通して縦と横の連携を図る。</p> <p><b>【教員の研修について】</b> 指導法研修部が中心となって、小学校教員対象の悉皆研修会を継続実施し、指導理論や指導方法の実践研修を行う。併せて校内研修で研修成果を共有し、学校全体の指導力を向上させる。(夏季休業中の2日間 3年計画) 中学校英語教員対象の悉皆研修会を実施し、指導理論や指導方法の実践研修を行う。(年間3日間)</p> <p><b>【深谷市小・中学生英語検定について】</b> カリキュラム開発部が中心となって、英語検定を開発し、中学校で試験的に実施する。 検定は、文部科学省「特定の課題に関する調査」(英語:「書くこと」2010年)及び埼玉県学習状況調査等をベースに作成し、実施する。 平成24年9月、10月(第1回、第2回深谷市チャレンジ)</p>
-------------	---

	<p>対象：中学校第3学年</p> <p>※「読むこと」「書くこと」の能力を評価する（試行）</p> <p><b>【ICTを活用した指導法の工夫改善について】</b></p> <p>深谷市小・中学校英語教育研究推進委員会（指導法研究部）が中心となって、市内29校で実践しているICTを活用した指導例をまとめる。併せて、全小・中学校で新たな教材開発に着手する。</p> <p>案) 小学校：Hi, friends! デジタル教材の効果的な活用の促進 オリジナル教材の作成等</p> <p>中学校：パワーポイントを活用した言語材料の導入、パタン・プラクティスの練習用教材の開発等</p> <p><b>【外国語学習に対する内発的動機付けを高めるプログラム開発について】</b></p> <p>本市では、JICA（国際協力機構）と連携して、「こころざし深谷国際塾」を開講し、郷土の偉人 渋沢栄一翁の精神を受け継ぎ、自己の生き方を見つめ、積極的に国際貢献できる人材の育成に努めている。この取組の成果を生かし、市内全小・中学校で、青年海外協力隊経験者の講話を聞いたり、生き方や社会貢献の精神などについて考えたりする機会を設け、深谷市の目指す児童生徒像「夢とこころざしをもち、まごころと思いやりのある深谷の子」の育成に迫る。各学校で、年間1回の講演会を行う。</p> <p>また、小学校第3～6学年の児童を対象に、「夏休み子ども英会話体験教室」を開講し、伸びる意欲のある子を更に伸ばそうとする機会を設けている。</p>
<p>第二年次</p>	<p><b>【研究組織体制について】</b></p> <p>○ 二年次からの追加事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校外国語活動拠点校として、深谷小学校、八基小学校、上柴西小学校、花園小学校の4校を置く。</li> <li>・ 小学校外国語活動推進教師を新たに設ける。</li> </ul> <p><b>【小中連携について】</b>・・・第一年次と同じ</p> <p><b>【教員の研修について】</b>・・・第一年次と同じ</p> <p><b>【深谷市小・中学生英語検定について】</b></p> <p>○ 二年次からの変更、追加事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 名称変更 「深谷市チャレンジ英語版」※中3生全員を対象に実施。</li> </ul> <p><b>【ICTを活用した指導法の工夫改善について】</b></p> <p>第一年次にまとめたICT教材の活用を通して、効果を検証する。併せて、全小・中学校で新たな教材開発（つなぎ教材）を行う。</p> <p><b>【外国語学習に対する内発的動機付けを高めるプログラム開発について】</b></p> <p>・・・第一年次と同じ</p> <p><b>【授業外の取組の充実について】</b></p> <p>拠点校が中心となって、「英語集会」や「論語の暗唱活動」、「昼食時の英語による校内放送」や「朝の会、帰りの会における英語の使用」など、先進的な取組を推進する。</p> <p>中学校では、対話形式の暗唱活動を新たに開発し、日々の生活の中で、継続的に実施する。</p>
<p>第三年次</p>	<p><b>【研究組織体制について】</b></p> <p>○ 三年次からの追加事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究推進拠点校として、深谷小学校、八基小学校、上柴西小学校、花園小学校の外に、新たに深谷西小学校、深谷中学校の2校を加える。</li> </ul>

	<p><b>【小中連携について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 三年次からの変更、追加事項 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学校ブロックを基本としていた授業研究会を、市内小・中学校教員が、全市オープンで参加できるようにする。このことにより、優れた授業や実践を、市内全域に広める。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【教員の研修について】</b>・・・第二年次と同じ</p> <p><b>【深谷市小・中学生英語検定について】</b>・・・第二年次と同じ</p> <p><b>【ICTを活用した指導法の工夫改善について】</b>・・・第二年次と同じ</p> <p><b>【外国語学習に対する内発的動機付けを高めるプログラム開発について】</b>・・・第二年次と同じ</p> <p><b>【授業外の実践の充実について】</b></p> <p>第二年次に行った拠点校の実践を、より一層充実させるとともに、すべての小・中学校に広め、深谷市全体の英語教育を充実させる。</p>
--	--

### (3) 評価に関する取組

<b>第一年次</b>	<p>深谷市小・中学校英語教育研究推進委員会（調査研究部）が中心となって、各種調査を行う。調査結果については、成果と課題を検証した上で、次年度の取組に生かしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ <b>深谷市英語検定</b>  実施時期：平成24年9月（試行）及び10月  対象：中学校第3学年（約500人）  検定内容：「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の能力  検定方法：筆記</li> <li>○ <b>小・中学生対象の意識調査</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>①実施時期：平成24年12月</li> <li>②対象：小学校第3学年～中学校第3学年（約9100人）</li> <li>③調査方法：質問紙</li> <li>④調査内容：外国語学習に対する関心・意欲・態度、能力など</li> </ul> </li> <li>○ <b>小・中学校教員対象の意識調査</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>①実施時期：平成24年12月</li> <li>②対象：小学校教諭（外国語活動を担当する全職員） 中学校英語教諭</li> <li>③調査方法：質問紙</li> <li>④調査内容：指導方法、指導内容、ICT活用、児童生徒の変容</li> </ul> </li> </ul>
<b>第二年次</b>	<p>第一年次に実施した調査を継続し、研究成果の比較検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ <b>効果の検証</b>  ※ 各学年の効果の検証を、次の方法で実施する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>①対象：小学校第3～6学年  実施時期：平成25年11月  検証内容：3年生 単元名「体を動かそう」  4年生 単元名「実りの秋発表会」  5年生 単元名「何が必要なの？」  6年生 単元名「行ってみたい国を紹介しよう」  小学校外国語活動の3観点  検証方法：教師による観察及びワークシート等の分析</li> </ul> </li> </ul>

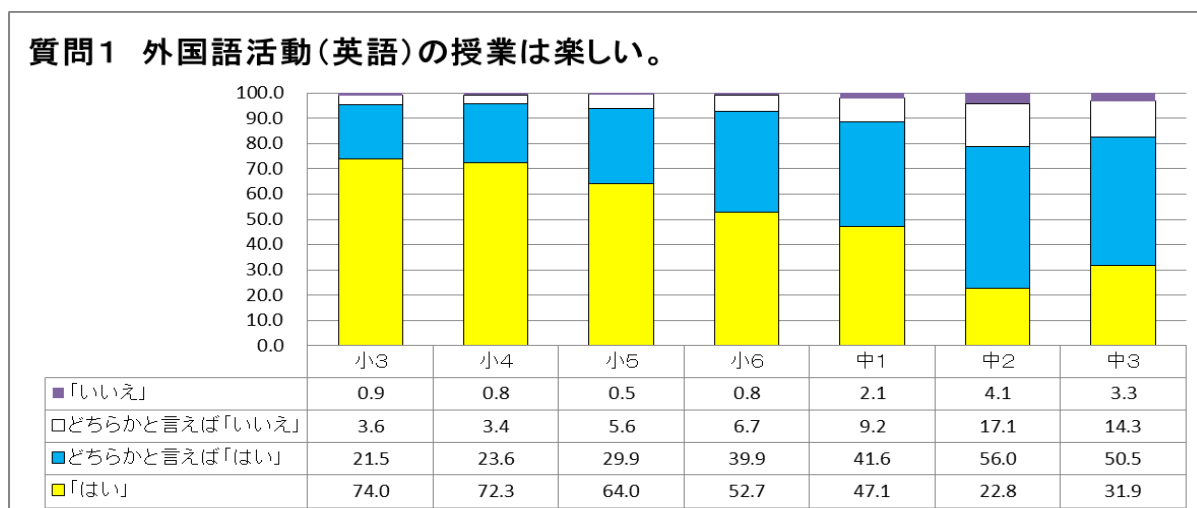
	<p>②対 象：中学校第1学年（Stage 2 の効果の検証）  実施時期：平成25年11月  検証内容：「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」  検証方法：筆記テスト、面接テスト（県中学校英語学力調査）</p> <p>③対 象：中学校第2学年（Stage 2 の効果の検証に含める）  実施時期：平成25年4月  検証内容：「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の能力  検証方法：筆記テスト（埼玉県小・中学校学習状況調査）</p> <p>④対 象：中学校第3学年（Stage 3 の効果の検証）  実施時期：平成25年9月、10月  検証内容：「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の能力  検証方法：筆記（第1回、第2回深谷市チャレンジ英語版）</p> <p>⑤対 象：中学校第3学年（Stage 3 の効果の検証）  実施時期：平成25年11月  検証内容：「話すこと」「書くこと」の能力  検証方法：筆記及び面接（「特定の課題に関する調査結果」より）</p> <p>○ 意識調査（児童生徒、教員対象）は、第一年次と同様とする。</p>
第三年次	<p>第一、第二年次に実施した検定及び意識調査の結果に基づき、最終年度の評価を行う。評価の際には、他の教育機関や民間団体が実施する各種調査、日本英語検定協会等が有する調査結果等と比較検証し、検証結果の信頼性と妥当性を担保する。</p> <p>○ 深谷市チャレンジ（中学校英語版）は、第二年次と同様。</p> <p>○ 小学校第3～6学年の外国語活動実施状況調査は、個々の実践の中でそれぞれの授業内容の視点から効果を検証する。</p> <p>○ Stage 2 及び Stage 3 の評価は第二年次と同様。</p> <p>○ 意識調査（児童生徒、教員対象）は、第一年次と同様。</p>

## 5 研究開発の成果

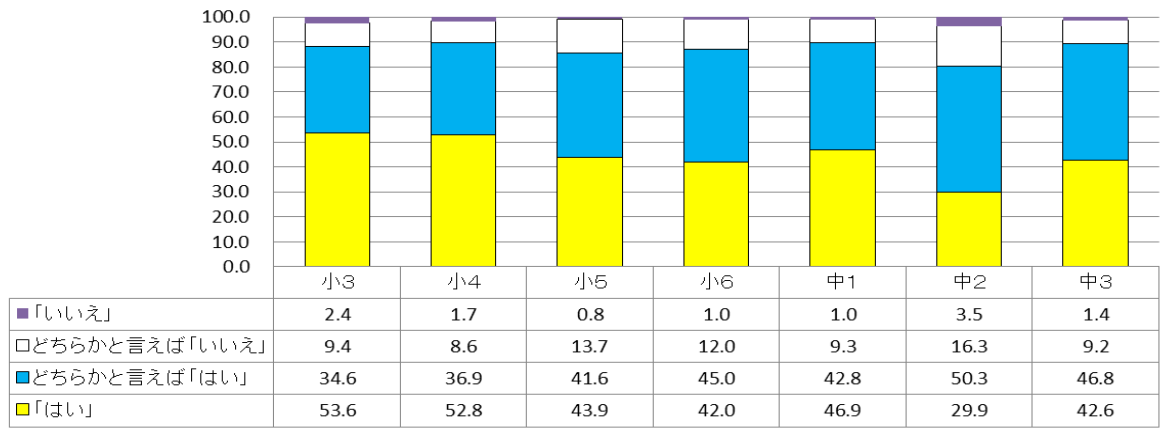
### (1) 実施による効果（主な成果）

#### ○ 関心・意欲・態度に関すること

研究開始当初から現在に至るまで、高い数値を示している。また、中学校1年生の12月時点においても90%近い生徒が、「英語の授業が楽しい」と回答しており、小中のなめらかな接続が図られている。



## 質問2 授業で積極的に英語を使っている。



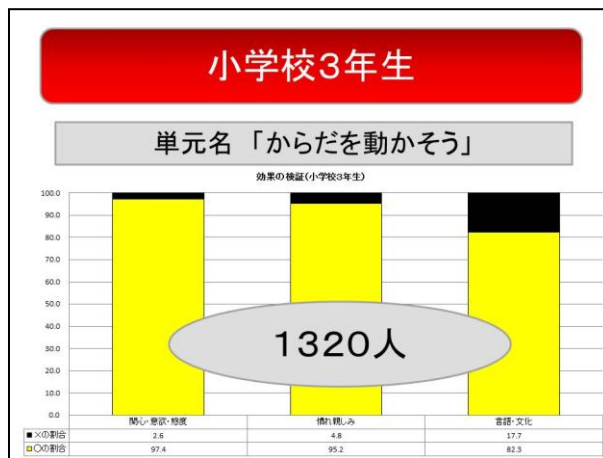
### ○ 小学校外国語活動実施状況調査の結果から

小学校第3学年から第6学年における「外国語活動実施状況調査」を実施し、「コミュニケーションに対する関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に対する気付き」の3観点で評価を行った。非常に良好な結果を得ることができた。

調査時期 平成25年10月～11月

調査対象 小学校3年生～6年生

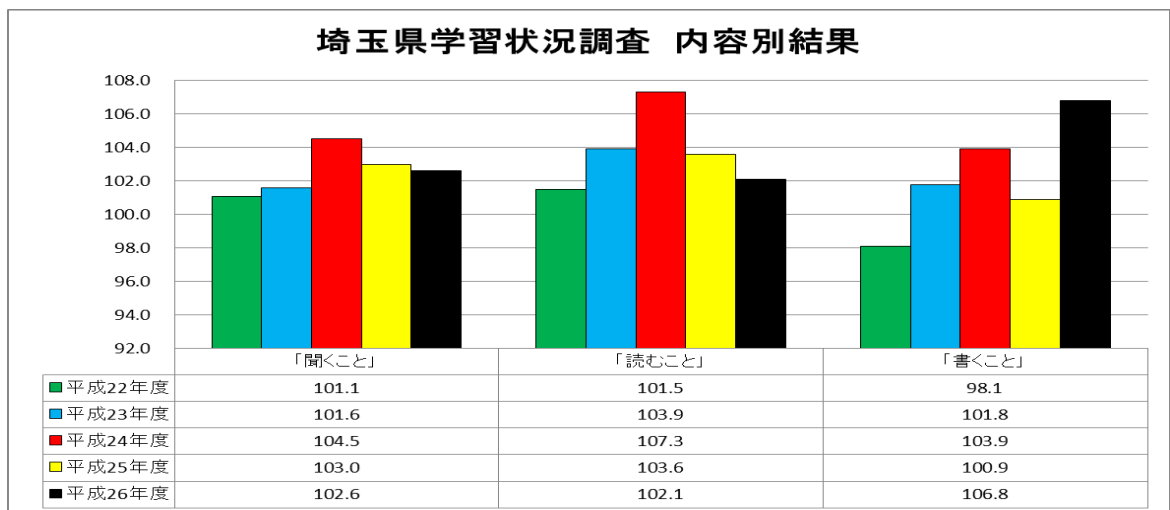
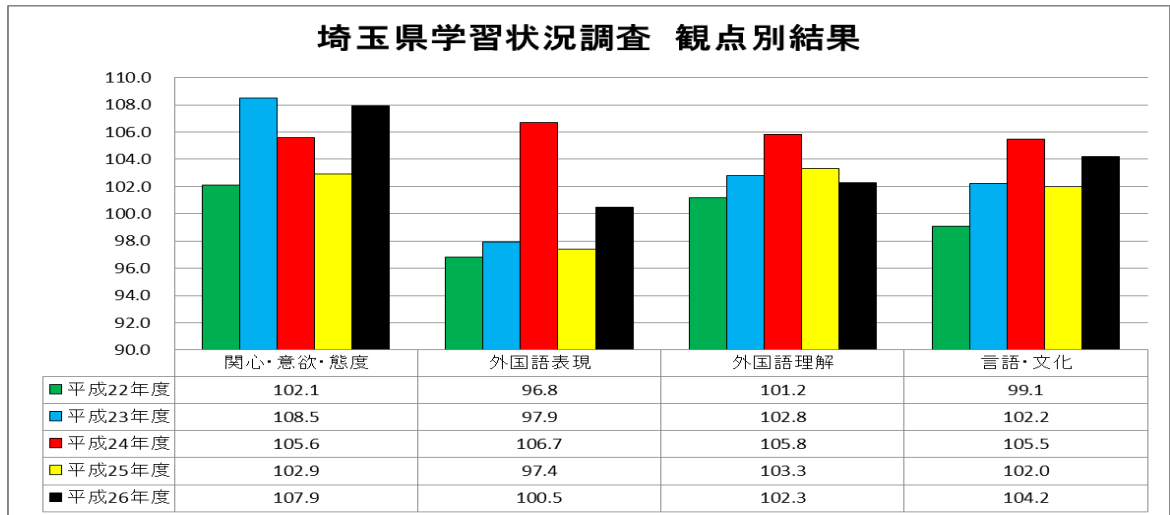
調査方法 共通の指導案と評価規準に基づいて、全19校で調査を実施



○ 中学生の学力に関すること

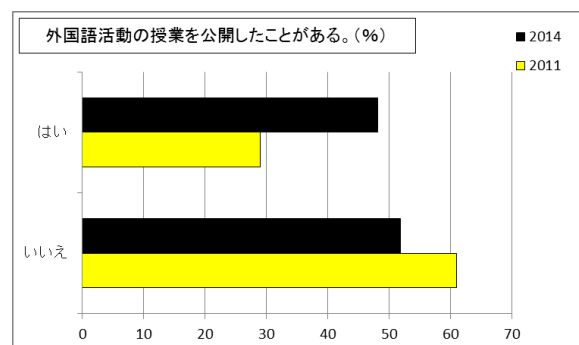
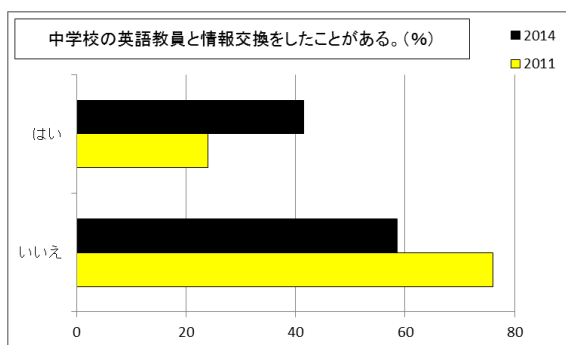
埼玉県では中学校2年生の4月に、埼玉県学習状況調査を行っている。過去の結果と比較すると、年々学力面でも向上していることが分かる。平成24年度と比較すると、若干の落ち込みは見られるが、深谷市の平均点は、依然として埼玉県内でトップレベルの成績であった。中学生の学力面でも本市の取組の成果が現れた。

※ 県平均を100とした場合の本市の平均点



○ 教師の意識に関すること

研究開始前(H23)と比較すると、小・中学校教員相互の情報交換や授業公開の機会が増えていることがわかる。まだまだ十分とは言えないが、市全体で研究を進めてきた成果が、具体的な行動成果として表れている。





## (2) 実施上の問題点と今後の課題

### 【課題1】指導技術向上に関すること

- 市町村単位の研修会を充実させる。
- 小・中学校教員相互の授業参観や情報交換の機会を増やす。
- 小学校教員の授業時数の削減が必要。
- 小学校に外国語活動主任と外国語活動推進教師を置く。
- 市町村に、複数名の外国語活動アドバイザーを置くことが効果的。

### 【課題2】小中を一貫して育てるコミュニケーション能力に関すること

- 「豊かな対話」「良質な言語活動」を児童生徒にたくさん経験させる。そのことにより、
  - ① 「対話を継続させる力」と「柔軟性（即興性）のある表現力」を育成する。
  - ② 「プレゼンテーション能力」を育成する。

※ 深谷市では、①の力を「忠恕の心を基本としたコミュニケーション能力」  
②の力を「立志の精神を基本としたコミュニケーション能力」として捉え  
指導にあたっている。

### 【課題3】指導内容に関すること

- 小学校においては、「小学校文化に根ざした外国語活動（英語教育）」を行うことが効果的である。
- この場合の「小学校文化」とは、子どもたちの生活や学習全般に関わる全てのトピックであり、それらとリアルタイムで直結する外国語活動を行うことが大切であると考えられる。
- 今後、小学校外国語活動が教科化されたとしても、小学校文化に根ざした英語教育という視点が必要である。（中学校英語教師は、小学校文化に更に精通しなければならない。）